

823
MEN2

紙江入楚

夏淳傳

54

夢浮橋

廿六歳

大将

花鳥より大に果乃よりなる事ありと
私事には甚だ七果の月れ其の末は長くはるに及ばぬと
ねむる月巻の末は七月れ五月とすてれ事なりと
と来るなり

夏大将来横川村面僧の物語

大将同伴女事給僧都妻詣不見及事

大に欲弱小野詣僧都事

常陸守子童為大将供僧都賜文放能ば童事

大将由系又一日彼童令持文遣小野事 童は月りなる事

先是今朝自僧都方遣消息於小野事

童見衆始若奉大将殿御又事

始若母なる事童由衆事

夢浮橋

一名

法師

[illegible]

之也其名爲吊詭一世之後而一遇大聖知其解者是且畧
遇之也苟莊周愛爲胡蝶栩栩然胡蝶也自喻適志與不知周
也俄然覺則蘧々然周也不知周之愛爲胡蝶與胡蝶之愛爲
周與周胡蝶則心有分矣此之謂物化

一名
法の師

法の師と君を志す者あり

私荏々將の奇

望海分經之

はそれなりなめしゆりも君とてさる事と一羽の雀目にあふ
 節にてそくに親くわたりぬ浮世をたすけぬ世中、愛れ
 まうこれ浮世ともあつたととりて憂ひ懐くと付たりこころ細海
 抄まうお遠くまでゆりも智れき乃娘の心ゆく打ん受あ
 んきしもあらしともらんとおやみんと浮世の事と意乃
 ゐひの事とよにゆりこころもあら木立果実よく可哀とて
 乃事とらへてあり

はるたそふりひれをの束いましはるゝ友の比ともやあふ
河海ありくくも草の事他又すお叶れ柳は春風吹

[illegible]

冥知覺多有非朕見於夢者正也正夢先兆之夢也冥者夢中
 驚冥而覺者也思者因所思而成夢也寤者時見覺時覺也喜
 者因有所喜而夢也懼者因有所憂懼而夢也懼與冥不同周
 禮注中却無分別此皆在我之神為之故曰神所交也交者交
 於外界也

是周礼リヤク而随引得勘載之ヲ

正夢物は感動をうけしなして、人々多く孔子周とて愛より此
 矣愛 傳説の事なりとならんやう

傳説
うきとく
なう
なう

いれぬと月石の入るまでとなく
思ふやう寝れぬのふり

夢上の友に六条卿息子の平生れうらにわんわん
んくーなまうん

瘠瘦

平生の事あるは是則ち物部一郡に
振るるなり

恒

此夢
今
山
れ
ま
く
る
る
愛
に

丁酉生私之多なりとありて此の諸事は世に於ても然る
まゝと覺え乃ち爰に末篇の名をあらわしてその由を記す
つらみありしは海に沈むる事ありしを記す

懼夢　うきあそびやうきこころなるを

惺夢

帝は東宮院とやらに居り、夏になると、
 御衣は千幅の御衣、西風の御衣、衣初疊の

葉ははるはる愛れ願ふことありき事とみゆもなかり是を愛
ふはあそひの心とて歌にゆつてうき世をうたふと
とてあそひの心とて歌にゆつてうき世をうたふと
とてあそひの心とて歌にゆつてうき世をうたふと

私は天正三年二月八日付一部御紙ノ時ニ申
 上レ分ルル事ニ付テハ、
 已上ノ事ニ付テハ、

已上策ノ為

山にわたりて礼いさきせ給ふるに神仏をたやうきとあふ

比叡山

月いの八日山中堂より蓮の花をたてて供ふる

あつひれあつひれ

中堂より給ふる山神のつとめ

あつひれあつひれ

あつひれあつひれ

あつひれあつひれ

あつひれあつひれ

あつひれあつひれ

あつひれあつひれ

あつひれあつひれ

あつひれあつひれ

あつひれあつひれ

あつひれあつひれ

あつひれあつひれ

しるはなふらん

秘
よつゝあはれなるにやと

弟のうへに
死すも
ゆるぎ
ぬ
うへに

屏
ろく
ふ
あ
し
は
ゆ
ん
の
洞

[illegible]

秘
蕉人初々芳れふまの御恩の位終るまふれ

并
夕旁此少壯為之此道人多能也

いふ代り花もあけり
又花が初酒定なりぬ花はれは

うれ少室の初々人の
集
少室の浮丹れなる事し

あにきといふてなともいふてん

御定とすさるやうに
とあるついでともやなり

15
徳久
そしきコエ

御才子小如くいふ事なと

浮舟傍柳中子行

文戒と書ゆふをたれを定むるを

やにうひさふにうとひん

秘
蕉のうらやまにひそめや私親あともあはれと云
ふりやと母あはれ偲ふときと云ふ心なり
昭和十一年

田中

もかとうふをこころふなり

その山をめぐりて

僧部浮屠之徒

あつたはるく是より下傍邪れん中へ

後くふつふと云ふ人ありて

蕉の性大にみえいかに
為るやと傳ふれども

あらまはよくしらべて
法師は役といひて
紙を

魚もあつて郊外は雪原を歩くと
傍社の今より高々

いふやうなところがある

美しき花あり

きつにすゐるめを

是下乃必音思桑のこゝ

中々いふらん

後日ありといふは

さつりふん

とろろに暫くお乗せなすとしておめえ

まにさんちへ

いふ事にはゆゑん

是より佛耶れを答ふ

2. 昔の人の心を

清外此輩と連て不富

うれ居のうへふにやうて

老氣 老癩 一云老氣

下男れあがり

まのわらふ事なり

わらふ事なり

わらふ事なり

信那の母れ事

信那の母れ事

いんもくやう

いんもくやう

定家公の事

薨逝之後下照姫天の衆

續日本紀云大室二由十二月

或又魂殿ともいふ

名れ山後と数百年後

よ紀人新事

後漢書

の事

御り附玉

魂殿

れ堂

後

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

義
魂殿より人にとまてかゝる人の養生をうけしむ
み名雅なれ事うけしむ
おひてまゐるいふなり

信郎の母れ年めけく行しむる

懐れぬまじあゝ
 一人心不亂
 阿蘇徳經

えんごふやれあけむさわく半そとつり

天物
欺將
黃帝伐蚩尤之時以正月十五日伐斬之

其首者上為天物其身伏而成地矣 本朝月令 以上河海

天祐と云ふは、本朝は明なり、而して天魔に類するなり。

系もわくもなりて
系もわくもなりて

二月より三月の末
俣郷にありけるに三月の末

前は秋の如くともなれども其の三月に於て人の如く

私に説く所を

六月、音に、但し、もて、い、て、事、ある、ひ、つ、ま、り、さ、さ、る、智、恵、
 り、せ、め、い、三、月、に、事、に、臨、み、養、は、告、部、に、文、に、六、月、つ、ま、り、の、ひ、は、

人の子と有り三月廿六卯月十日とんすゝ宛

又僧部明市文
い三月壬午
をく仲母

此乳をくるともふくくと
仲中屋よりいそと流るる

又しまた紀伊守より
乃ちあつても
あまれ御女一
人なり

如くしてこれに
あつては、
また、

少々といふ所は三度より力と云ふ事也

いふ所のすゝさゝのたうあはれいんもそれゆゑ

[illegible][illegible]

月、今又三月中、宛人の名を記す。又同の月、宛人の名を記す。

[illegible]

五月より迄六月七月の各々ありて

後了秋より其の事と川田れねと

いん時高も叶ふ又聲此中為歌う志あゆみんとみえ

今又の八月十日ありは、
警りれは、ぬくよきなり。

るさうさし三月までまゝさうれ何ともなれ

な後惜れぬの

僧都の后に

後 護身ゴシ

うれさうさめさうさうり何てこゝろん

い前れぬ僧都子目れさうの対面坂なすてトおれぬ

事さうさうさうれ

信はらうさうさう

い 壺 又飲さうお氣

ゆさうさうさうさうに何

後 山さう

おれさうさう

えりさうさうさう

後 蓮御存知の人さうさう

さうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさう

とゆはさうさう

さうさうさうさう

後 蓮の心

信はらうと信はらう

私にさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさう

信はらうさうさうさうさうさうさう

愛れん何て

後 愛れん何て

後 多れぬ必要信はらうさうさうさう

くさうさうさう

蓮の心はらうと信はらう

信はらう

あくゆりさうさうさうさうさうさう

信都の心蓮の周章とあ

私蓮の心あまう信はらうさうさう

れさうさうさうさうさうさうさう

うじつひさうさうさうさうさう

うさうさうさう

わさうさうさう

後 信都れさうさう

さうの世れさうさう

前業れ不感とて物さうさう

さうさう信都も似合さう何と事信はらうさう

業病鬼病四大病と業病に前業と感さう病鬼病の心

狐天狗等々小蛇を喰ふ事して大病に成る大風よりおこり
あつ風を思ふ湯におくさる病に成る素師の事と云はん
いふにわづらひは後にも鬼病なりて又業病なり
あつ風の子に
後世に
生王家無等倫八十之子孫
日中記に云く孫
あつ風の子に
後世に
生王家無等倫八十之子孫
日中記に云く孫

あつ風の子に
後世に
生王家無等倫八十之子孫
日中記に云く孫
あつ風の子に
後世に
生王家無等倫八十之子孫
日中記に云く孫
あつ風の子に
後世に
生王家無等倫八十之子孫
日中記に云く孫

あつ風の子に
後世に
生王家無等倫八十之子孫
日中記に云く孫
あつ風の子に
後世に
生王家無等倫八十之子孫
日中記に云く孫
あつ風の子に
後世に
生王家無等倫八十之子孫
日中記に云く孫

あつ風の子に
後世に
生王家無等倫八十之子孫
日中記に云く孫
あつ風の子に
後世に
生王家無等倫八十之子孫
日中記に云く孫
あつ風の子に
後世に
生王家無等倫八十之子孫
日中記に云く孫

いとふしあられと

意のふゆとてあつた

うれはさうのふしにゆきもにゆくあつた

秘 意のふゆとてあつた

笑うれやのふゆ

ことつらうとてあつた

常盤のふゆとてあつた

それ人のふゆとてあつた

重とつたふゆとてあつた

これふゆとてあつた

御文とつたふゆとてあつた

なふゆとてあつた

ことれやのふゆとてあつた

和のふゆとてあつた

うもくもふゆとてあつた

うもくもふゆとてあつた

つらふゆとてあつた

意のふゆとてあつた

あつたふゆとてあつた

とてあつたふゆとてあつた

あつたふゆとてあつた

あつたふゆとてあつた

あつたふゆとてあつた

あつたふゆとてあつた

あつたふゆとてあつた

あつたふゆとてあつた

あつたふゆとてあつた

あつたふゆとてあつた

あつたふゆとてあつた

あつたふゆとてあつた

あつたふゆとてあつた

うゑのやめくものゝめんとそ ねあをくうん

ふたぐさせぬ 秘 信那のふり

蕉のぬさめぬとすきき 信那のふきくうんを信

じれくふふありて 信那れきううん

すあめくふふありて 秘 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

ふふくふふありて 信那れきううん

うわらうらんともうひゆうくくさほわ

私にあらぬ秘義同くをわたり

あやうきう火のれうあめ光 煮下しの秘

美れうあめ光とい人の多きいあにうわ

私のうわあめ光とい松明のうわうてわうわわわ

しうわあめ光というわあめ光というわあめ光

あやうきう火のれうあめ光というわあめ光

い奇あめ光というわあめ光というわあめ光

しうわあめ光というわあめ光というわあめ光

あやうきう火のれうあめ光というわあめ光

私にあらぬ秘義同くをわたり 海藻

あやうきう火のれうあめ光というわあめ光

い奇あめ光というわあめ光というわあめ光

あやうきう火のれうあめ光というわあめ光

うわらうらんともうひゆうくくさほわ

私にあらぬ秘義同くをわたり

あやうきう火のれうあめ光というわあめ光

い奇あめ光というわあめ光というわあめ光

あやうきう火のれうあめ光というわあめ光

い奇あめ光というわあめ光というわあめ光

あやうきう火のれうあめ光というわあめ光

い奇あめ光というわあめ光というわあめ光

あやうきう火のれうあめ光というわあめ光

い奇あめ光というわあめ光というわあめ光

あやうきう火のれうあめ光というわあめ光

い奇あめ光というわあめ光というわあめ光

あやうきう火のれうあめ光というわあめ光

い奇あめ光というわあめ光というわあめ光

あやうきう火のれうあめ光というわあめ光

は 女と姉とでいひつゝ男と女とをいひつゝあり

秘 浮ぬれぬと姉と女といひつゝあり 兼 兼 兼 兼

うにまゝつゝにあり

驚きつゝにあり

それわづらひの 母のふつとあり

つゞきつゝにあり

おきつゝにあり

うに松八ふれぬ女といひつゝにあり

そとあり

うに唯つゝにあり

うに唯つゝにあり

兼 浮ぬれぬと姉と女といひつゝにあり

うに大將との女といひつゝにあり

兼 小君と 秘 小君と 浮ぬれぬと姉と女といひつゝにあり

うに唯つゝにあり

秘 迷惑つゝにあり

兼 兼 兼 兼

うに唯つゝにあり

兼 兼 兼 兼

うに唯つゝにあり

兼 兼 兼 兼

うに唯つゝにあり

兼 兼 兼 兼

うに唯つゝにあり

兼 兼 兼 兼

うに唯つゝにあり

兼 兼 兼 兼

うに唯つゝにあり

兼 兼 兼 兼

あふとつるこれわくわくする

あふとつるわくわくの

小若し

是是 白氏文集

あふとつるわくわくの

藁庵

四座

南唐

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

あふとつるわくわくの

ふとくま 毎事かまひてくま
とくまをわたり 悉く

まふくわんわんわんわん

海內外分明

ふさし何事も事なりとていふ

二九君公れ王也

常れりて浮ぬれりてあひまひ

人々とて厚くこれ胡とみえう

すう外はしきく足なり

卯辰

美乃禱

今世よりあり

第
五
十
五
回

わにくはせうて

臺の如くありし時の事に

らにさへ

集
字
子
子
子
子
子

うづつと愛れぬあり

秘
差のちとて
筆

とく

養
美
中
の
子
を
は
な
し
て
お
も
い
な
さ
し
ま
す

孝子之

秋
信
舟
下
似
一
二
三

后之此詞多矣

なふうふにせよるねも

浮舟中

浮舟銅とあり

とつちきひ

五ノ海老酒

會より
あつても
あつて
らん

花
海の底に
花より
花より
花より

70

笑
海
と
お
り
ん
と
お
も
い
れ
ぬ
と

海人海

ゆゑに
時の事にとけり

[illegible]

ふわりとわ

紀傳よりぬくべきの事と云ふ

そりきふくし

紀伊守と伊予守

芳物と云はれども
芳物と云はれども

多一人の如く

修身之要

三才圖會

秘
く
九
フ
}

のりすのり

母の事

乙 佛部 如 了 人

紅
うしろ
れ
事
う

むうとありきりし
美 信女とわぬ屋にいらぬ

いとうひしうな
秘 居るなり

即ちいふなりにもあまうくゆなり

美 信女とわぬ屋の中にあつてゐるまゝぬかたしゆり
いゝまひてんふれと書いゝ
美 信の事

あつたうつゝあつたやとあつ
あつたうつゝあつたやとあつた
美 信の事

本丁ふめふめいれ
美 信の事

はるしりいさつと
美 信の事
私 信の信女のことといふや
美 信の事
まゝいゆり
美 信の事
ゆめとふれぬなり

うゝあめい
美 信の事
うゝあめい
美 信の事

私 信の事
美 信の事

美 信の事
美 信の事

美 信の事
美 信の事

美 信の事
美 信の事

美 信の事
美 信の事

美 信の事
美 信の事

美 信の事
美 信の事

本丁れをふりてせられ 集 信女とあふさる

と人よめぬ地をれ 集 といふ

凡丁うゝれと信女れ 集 といふ

あふさる 集 信女 集 といふ

御うらうと信女 集 といふ

くうと 集 信女 集 といふ

むさ 集 信女 集 といふ

わり 集 信女 集 といふ

く 集 信女 集 といふ

あふ 集 信女 集 といふ

の 集 信女 集 といふ

少 集 信女 集 といふ

い 集 信女 集 といふ

い 集 信女 集 といふ

白 集 信女 集 といふ

ゆ 集 信女 集 といふ

あ 集 信女 集 といふ

と 集 信女 集 といふ

ま 集 信女 集 といふ

れ 集 信女 集 といふ

な 集 信女 集 といふ

わ 集 信女 集 といふ

い 集 信女 集 といふ

あ 集 信女 集 といふ

人 集 信女 集 といふ

う 集 信女 集 といふ

は 集 信女 集 といふ

は 集 信女 集 といふ

は 集 信女 集 といふ

は 集 信女 集 といふ

養 ありあけいひくちるまゝのめり

こけあけやういふ 養 まゝの事

のれりぬり 養 意い 浮ぬのこもくちをあり

くは 養 まゝのこゝろの 養 はふそて 浮ぬれふて

そのめ 養 わめいぬ 養 今れ 養 まゝぬ 養 まゝぬ 養 まゝぬ

う 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

る 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

い 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

う 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

ふ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

い 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

す 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

わ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

わ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

わ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

わ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

わ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

わ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

わ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

わ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

わ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

わ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

わ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

わ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

わ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

わ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

わ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

わ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

わ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

わ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ 養 まゝ

遼倒之餘功史之暇忘自樂天也俗文字過既紫式部源氏物語之詞篇已通至教之命脉白已貫和歌之骨髓於是每觀覽智新月盛繹悟今是昨非遂挹河海之流盡真源於心底袖促花鳥使寫餘情於毫端也耳文明四年毫集壬辰除月上幹桃花居士七十一歲 誌焉

弄花云文明八年仲夏初九入眼畢

從同年七月中旬迄 落字 上旬見合物語年同九年二月重加

點 一 點云合點畧之肖柏追聞書初聞之後十四年長亨三

一 年季春八秋種玉受菴主說合點了

一 卷上文明九宗祇法師本之不審同題後成恩寺禪閣答也

一 勘上文明十二庚子 季春肖柏尋申一禪閣

余已以彼自筆彼注付勘我合點本也

其外細碎同題亦也 以上西問答花鳥未遂一覽之前

類仍被抄之內不審亦有之

私今所寫之者件兩問答并追而圖書千卷一所書載之重

雅之不審重說本雖益先本寫置者也

右肖柏老人聞書借請之六月廿七日立筆連已忘忙八月十

七日終其功七冊調之靜加一見可清書之抄物也

永正七年記之 在御判逍遙院也

又云此抄曰六月下旬立筆今日經書功調而為七冊不可他見而已

永正第七 八月十七日 三条西 入道前内大臣 是下逍遙院也

壬抄奧書云此聞書 旨赴注夢浮橋與欣 胸臆荒涼之談卒余所注

置不可漏脫之處能列刺史義總數寄深切之餘寄紙懇望聞

不獲止書全部以附与之 卷已下加一見了猶宜令取捨不

可被出深窓之外而已

大永戊子 夏五下旬候 老比丘 御判 逍遙院内府

同重奧書云

此抄胸臆之談公條卿卒余之聞書也達先年能列刺史之

聽

寄紙懇望不獲止寫送之處不慮之災失却無念之由重而來
命之間終書功云一見外題涂光筆冗賢、可被禁他見

天文甲午曆冬至日

八旬老衲判同上

年三

與書云源氏物語年三一冊者故禪定閣下所製作也件正本
應仁大亂於桃坊文庫為白浪奪散畢爰經十年不慮感得之
憚無物干取喻此一帖以彼真本加書寫者也末流布世間雖
無出意外感教奇之志付屬充金吾訖深秘箱底莫令他見

永正七載季夏中吉前博陸叟御判

私後成恩寺殿庠息一条殿冬良公也

此光源氏物語者本朝風俗翫之為吟風弄月之擬徑矣余先
是時已雖陪三光院內府講筵不能畢功於全部以為遺憾焉
而後謄寫河海花鳥余情弄花等之諸抄然以其繁多而不便
一覽雖校正之期於一在微臣之列未脫仕宦羅網南去北
來無得閑暇空思而止而已矣茲焉也足軒主素然老人以余
有識荆之素癖迹飯隱陋邦丹之後列老人也種姓不凡才識
高明一時名流也加旃親炙三光內府勤侍講惟究此物語之
奧旨依之就老人求果余素願於是老人忽感其志考之諸抄
繁者訛者正缺者補互有得失者而存之十稔之間雪塞露板
畢五十五帖可謂集大成也及題以岷江入楚矣古云墨臺山
硯楚江紙乾坤今併案此抄豈多讓哉此所謂入楚無底者老
人之硯漏者也

肯慶長第三歲在

戊

戊星之夕有誌焉 函齋叟玄旨判

岷江入楚全部五十九冊自
陽明公下賜之尤可謂家寶
長為不忘深恩加與書所也

延室六年_{戊午}林鍾下旬_{法橋} 墨壽

